

# 家庭生活における非親族者の役割

浅井 由美

## はじめに

家族で家庭を中心に生活するライフスタイルは、多くの人に支持されてきた。家族に生活集団としての強い結束や統一性がある場合には、家族が大切であると強調されることはない。むしろ、近代文学の「家」をめぐるテーマのように、家族との葛藤や家族からの開放が問題となる。

家族の絆が弱くなり家庭崩壊の不安が高まれば、人々は安心を与えてくれる過去の家族像をなぞろうとする。また、経済の停滞や日本型雇用慣行の崩れなど、生活不安の中で、家族回帰が起こる。

震災1年後の朝日新聞世論調査でも、家族とのかかわりを最重視する結果が報告されたり。同時に「近所の人や地域社会との絆が弱まっている、深めたい」という人が多かった。

親族や職場の人との絆も、実際には家族との絆も弱まっている中で、近所の人など、非親族者との助け合いは不可避である。しかし、家族以外の人とのかかわりには、家族関係とは別のむずかしさがある。

小島信夫の小説『抱擁家族』は、妻の情事をきっかけに崩壊していく家族を描いていた<sup>2)</sup>。「家の中をたてなおさなければならない」と、主人公の三輪俊介が新築したモダンな家の設備は故障ばかり、妻の乳がんは進行、子どもたちは勝手なふるまいをし、悲喜劇が繰り返される。

俊介は「家政婦のみちよが来るようになってからこの家は汚れはじめた」と思ったり、「みちよがいたから、おれの家がもっていたのではないか」と思ったりして、家政婦やそ

の他の「他人」を家庭に入れたり出したりしている。この家庭は、非親族者を必要としたり排除したりしながら、崩壊していった。

家庭生活において、非親族者はどのような役割を果たすのだろうか。非親族者との生活に慣れていない現代家庭は、非親族者をどのように招き入れ、かかわればよいのだろうか。

## 1 生活組織としての家庭

家族は家庭を中心に生活することが多く、家庭は長く生活組織の中心であった。家庭は、そこから学校、病院、企業、行政組織など、様々な組織が派生したという意味でも、それら「派生組織」に人を供給するという意味でも、「根源的組織」といわれる。

しかし現代の家庭は、家族の生、老、病、死、衣食住、教育など生活のほとんどを、派生組織に委託している。様々なサービスを提供する派生組織がなければ、家庭生活は維持できない。家庭は、生活組織として中心的なものではなくなった。

豊かな社会、福祉国家の実現は、家庭に利益を与え家庭をサポートしながら、他方で、家庭の存在意義を弱めた。交換経済の発達は、家庭内の贈与を通じて調達していたものを、家庭の外から買えるようにした。調達機能に優れる交換によって、様々な派生組織からニーズをみとることができる。また社会全体で行う贈与が、失業者、離婚者、病人、高齢者などすべての個人の生活を、最低限度は保障している。

家族構成員は、一つの家庭を中心に生活しなくても、さらには家庭がなくても生活できる。運命的にある家庭に産み落とされる子ど

もを除けば、個人にとって家庭は、ライフスタイルの選択肢の一つになった。自由に選択できることに価値をおく若者には、ケイタイとコンビニが、家庭に依存しないで快適に生活するためのサービスを定着させている。

子どもを産み育て派生組織に人を供給する家庭の役割も、むずかしくなってきた。子どもの虐待、引きこもり、自立できない若者など、家庭の失敗例は多い。家庭の教育力の低下に対する危機意識も強まっている。

「家庭支援論」では、特別な配慮の必要な子どものいる家庭、ひとり親家庭、共働き家庭だけでなく、専業主婦（専業主母）のいる家庭も含めたすべての子育てが家庭が、何らかの支援を必要とするとしている。

梅棹忠夫は、家事労働は生産労働から排除された妻（主婦）に労働の場を提供するものとしながらも、「世界に類のないきれいさ、清潔さ。衣食住のすべてにわたってはたらいっている、繊細な美的感覚。念入りの育児法と熱心な教育。このような生活文化の高度な洗練が、……（中略）……現代地球上にみられるもっとも高度に発達した家庭文化のひとつ」と述べていた<sup>9</sup>。

しかし家庭の日常の食卓は貧しくなり、グルメブームがありながらも、「崩食」「放食」などの言葉もうまれている。とくに子どもの欠食、孤食、偏食などの食生活の乱れが報告されている。

岩村暢子によれば、主食と主食の組み合わせやお菓子だけのメニュー、買って来た惣菜や弁当を食べる中食、個の尊重を優先した

「バラバラ食」など、家庭の食卓の実態は激変している<sup>10</sup>。気がすすまなかったなど自分の都合を優先する、好き嫌いに寛容で強制はいけない、「楽しい」を優先するなど、これまでとは違う価値観の家族が出現している。

梅棹忠夫が評価した「高度に発達した家庭文化」は、伝承されなくなったといえる。派

生組織に依存しながら根源的組織として残された役割も十分に果たせない家庭の生活と、ニーズを派生組織でバラバラにみたすホームレスの生活には、それほど差がないようにみえる。

## 2 小さくなる家庭の協働と非親族者

近代初めころまで、日本の家庭には、父（夫）と母（妻）、子どもに加え、祖父母、おじおばなどの近親者だけでなく、非親族の同居人もいることが珍しくなかった。近代文学には、「女中」、「奉公人」、「書生」、「居候」などと呼ばれる非親族者、「同居する他人」がよく登場する。核家族であっても、非親族者の同居によって、大家族のようにみえることもあった。

その後、夫婦と子どもだけの核家族化が、さらに小家族化がすすみ、家庭は少数数の協働となった。家族以外の人同居する家庭はわずかで、家庭崩壊を表現するときに、「妻は家政婦代わり」「夫は家族というより居候」と、非親族が使われるくらいである。落合恵美子は「近代家族」の特徴を整理した7項目の中に、「非親族の排除」を挙げている<sup>11</sup>。

家庭も一つの協働体系ととらえれば、その人的システム、物的システム、社会的システムが変化し、小さくなったといえる。親族も女中もいなくなった家庭では、専業主婦が家事育児を行った。しかし、その専業主婦も少数派になった。

ヒトが減ったことで、家庭のもつトキもカネも減る。時間持ちだった祖父母や専業主婦がいない家庭は、家事労働力不足となる。さらに、リストラの夫（父）、パートの妻（母）、フリータの息子のように、新しい貧困も広がっている。

家庭の協働の脆弱化を補う方法として、子の家族が、カネもトキも持っている親と同居する「平成拡大家族」がある。親と同居し、

親のお金、家事育児などの時間を融通してもらっている。親との協働を実現すれば、夫婦共働きによって収入を確保し、生活の満足度も高い。しかし親が高齢化すると、家事育児自体が重労働となるとともに、介護の問題もある。

親や親族との助け合いが無理な場合には、他人を家庭の協働に加えざるを得ない。小さくなった家庭の協働においては、子育ても老親の介護もさらには家事も、家族だけでは限界がある。

一部では、時間をお金で買う、お金で解決できることはプロに頼むという合理的価値観から、家事のアウトソーシングがすすんでいる。都市を中心に「プチ家政婦」「カジュアル家政婦」などの家事代行サービスが広がってきた。また育児不安解消や虐待防止のために、育児ボランティアや育児ネットワークもある。さらに、他人との共同生活や擬似家族を選択する試みもうまれている。

非親族者を排除してきた家庭も、少子高齢社会を迎えて、家族だけでは生活できず、他人の労働や時間を必要とし始めている。

### 3 「他人」の視線

ところで現代の家庭が必要としているのは、他人の時間や労働だけだろうか。他人を招き入れることは、家庭にどのような影響を与えるのだろうか。

家族にとって他人は、気を遣う存在でストレスにもなるが、別の意味もあるようだ。家庭は、家事労働力としての他人だけでなく、他人がそこにいること自体を必要としているようにみえる。

清水美知子によれば、「住み込み女中」には行儀見習いや家事修得という目的もあって、仕事とともに奉公の意味合いもあった<sup>6)</sup>。家庭が学校で、主婦は女中の目を意識し手本となる言動し、模範となる家風をつくらなけ

ればならなかった。子どもは、女中という他者を通して、気配りやコミュニケーションの方法を学んだ。

清水によれば、住み込み女中が消えて家族から他人がいなくなると、女中の目から開放され気楽になったが、他人の視線にさらされる緊張感を失った。これが、今日の家族問題の原因の一つであるという。

他人の視線は、家族に緊張と秩序をうみ、家族らしくさせてくれるようだ。かつて家族の住まう家には、たとえ非親族者が同居していなくても、他人の視線をじょうずに取り込む「しかけ」があった。

日本住宅には、縁側、勝手口、土間があり、他人を迎え入れやすくなっていた。縁側は、大人の情報交換の場、子どもの社会教育の場、作業の場、瞑想の場、応接室代わり、搬入の場、趣味の場、遊戯の場、鑑賞の場、監視の場など、多目的スペースであった。

縁側は「内」とも「外」ともいいきれない共同空間で、そこで近所の人とコミュニケーションをするだけでなく、そこからプライバシーを覗かせた。そこで、近隣との信頼や連帯がうまれるとともに、他人の違う視線を感じとることができた。

現代の住宅には、縁側のようなオープンであいまいな空間はない。ドアを閉めると、外と内が遮断され、他人の目が届かない。家族はそれぞれの個室にこもり、ネットで外界とつながる。

しかし、家族のために作った手の込んだお弁当のブログは、他人の目を意識している。収納、掃除、節約、家事の極意を指南する達人主婦のアイドル化現象には、生活文化の伝承が家庭で果たされない背景がある。しかし「家事ドル」は、主婦が、自分のがんばりを誰かに見せたい評価されたいと、他人の目を必要としている現象でもある。

家事や育児を、支払われることも評価されることもないルーティンワークと思えば、家庭独自の家風や家政の方針はうまれない。非親族者を全く排除してしまうよりも他人の視線があったほうが、家事も育児も「生活文化」となり、家族は家族らしく生活できるようだ。

#### 4 新しい生活の哲学

組織は、その存続の過程で、一定の性格（価値、規範、理念など）をもった社会的存在になる。組織の意思決定の背後にあるそれらの準則を、C.I.バーナードは「組織道徳」とよんでいる<sup>7)</sup>。社風や校風もその例だが、「組織文化」とよんだほうがよい場合もある。長く続く組織は、独自の「組織道徳（文化）」をもち、それは各メンバーの私的行動準則の一部に内在化される。

家庭も、良くも悪くもその家庭なりの価値観や規範などの「組織道徳（文化）」をもっていた。それは、メンバーの日々の暮らし方やものの見方・考え方を内部から規制していた。

たとえば、かつての「家」は個人よりも「家」全体の利益を優先し、養子縁組をして他人を入れてでも「家」を維持・発展させる合理性をもっていた。その是非は別としても、一つの「組織道徳」を確立していたといえる。

家族以外の親族も女中や居候などの非親族も、家庭の協働に参加するメンバーは、その家庭の組織道徳を自分の行動準則の一部として内在化する。家庭の組織道徳が確立していれば、お互いの行動の予測が可能で信頼が生まれ、行動の調整も容易となる。

他人も協働に加えた「家」が組織として維持存続するためには、組織道徳が必要だったとも、他人が組織道徳を創造させる役割を果たしたともいえる。

縁側でお茶を出しても食事は出さない、プライベートを覗かせてもそれより内に他人を入れない、一見あいまいなようで毅然とした他人との距離のとり方も、組織道徳（文化）の存在があつてのことだろう。

いったん排除した非親族者を家庭の協働に加えるのならば、非親族者をメンバーに入れることのリスクやわずらわしさなどを超えて利益を引き出す経営能力と、組織道徳（文化）が必要である。

小島信夫の「抱擁家族」は、組織道徳の崩れた家庭に他人を入れたことで家族が混乱し、さらに他人を入れたり出したりしながら崩壊した。

今後、子育ても老親の介護も、家族だけではむずかしくなる。家族が家庭で生活するためには、家族以外の人、非親族者との協働が必要である。生活を再構築するために、日々の暮らし方、生き方についての新しい基準や規範、新しい生活の哲学が必要になってくる。

注

- 1) 朝日新聞社世論調査 2012年3月21日付朝刊。
- 2) 小島信夫『抱擁家族』講談社,1964.
- 3) 梅棹忠夫『女と文明』中央公論,1988.
- 4) 岩村暢子『変わる家族変わる食卓』勁草書房 2003, 『〈現代家族〉の誕生』勁草書房 2005.
- 5) 落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房,1989.
- 6) 清水美知子『〈女中〉イメージの家庭文化史』世界思想社,2004.
- 7) Chester I. Barnard, *The Functions of the Executive*, Harvard University Press,1938. (山本安次郎ほか訳『経営者の役割』ダイヤモンド社,1977) .